毘沙門さまと貧乏神　　京都府

むかし、ある村に、なまけ者の男がいました。働かないので、貧しく暮らしていました。けれども、人並みに金持ちになりたいと思っていました。

あるとき、男は、大家さんに相談しに行きました。

「いつまでもこのままではいかんと思います。何か金持ちになる方法はありませんか」

すると、大家さんはいいました。

「そうか、そうか。それはいい心がけだ。それなら教えてやろう。正月の七日は、毘沙門さまのお祭りだ。その朝早く、まだ夜が明けないうちに、毘沙門堂に行って待っていれば、福をたくさん背負った神さまが馬に乗ってやって来る。その神さまをつかまえれば金持ちになるぞ」

男は喜んで帰りました。

正月の七日の朝、まだ暗いうちに、男は毘沙門堂に行ってお参りして、待っていました。すると、大家さんのいったとおり、ぽっかぽっかと、馬の足音がしてきました。

「さあ来たな」と思って見ると、神さまは、まことにたくましい大きな馬に乗ってやって来ました。馬は鼻息をぶうぶうはいています。男はこわくなって、とびつくことができませんでした。神さまはそのまま行ってしまいました。

「ああ、残念なことをした。もう来ないかなあ」

男がそう思っていると、またぽっかぽっかと馬の足音がしました。

「やれやれ、来てくれた。今度こそつかまえるぞ」と思って見ると、神さまは、前よりもっとたくましい大きな馬に乗っていました。男は手も足も出ません。とうとうその神さまものがしてしまいました。

「ああ、残念なことだ。なんとか、もっとやさしい馬が来ないかなあ」と思っていると、また馬の足音がしました。

「今度こそつかまえるぞ」と思って見ると、やさしそうな年寄り馬でした。男はぱっととびつきました。よく見ると、その馬に乗っていたのは、お金をたくさん背負った神さまではなくて、よぼよぼの貧乏神でした。男はがっかりして、

「もう毘沙門さまにはたのまん。毘沙門、手を放せ」といいながら、すごすごと帰って行ったというお話。

おしまい

村上郁再話

資料『弥栄町昔話集』大谷女子大学説話文学研究会